

2017年度ラモン・マグサイサイ賞を受賞

石澤良昭教授（上智大学アンコール遺跡国際調査団団長）

石澤良昭教授（上智大学アンコール遺跡国際調査団団長）は、「アジアのノーベル賞」と呼ばれるラモン・マグサイサイ賞（2017年）を受賞し、2017年8月31日、フィリピン・マニラで行われた授賞式に出席した。同賞は、フィリピンのラモン・マグサイサイ大統領を記念して1958年に創設され、すでに59年目にあたる。



今回の受賞は、上智大学がカンボジアで推進してきたソフィア・ミッション（国際奉仕活動）への国際的評価である。上智大学は“Men and Women for Others, with Others”（他者のために、他者と共に生きる人）を教育の精神に掲げ、カンボジアにおいてこのソフィア・ミッションとして取り組んできた、1979年に難民救済活動「インドシナ難民に愛の手を」国内外で開始した。1980年代にカンボジア国内へ入り、1989年から人材養成をアンコール・ワット遺跡の現場で開始した。以来約30年にわたるこのアンコール遺跡の保存修復と人材養成活動は、1991年の和平回復後、遺跡現場ではカンボジア人同士の和解と文化復興につながり、そしてカンボジア人が民族の誇りを取り戻すきっかけとなった。この上智大学のソフィア・ミッションの長年にわたる活動と実績がアジア社会およびラモン・マグサイサイ賞財団から高く評価され、今回の受賞となった。

毎年アジア地域で社会貢献など傑出した功績をあげた個人や団体に対して、ラモン・マグサイサイ賞財団から贈呈されており、2017年は石澤教授ほか個人4人と1団体が受賞した。受賞の功績について、同財団は、以下の評価理由を挙げている。

①「アンコール・ワット遺跡保存修復は、カンボジア人の手でなされるべき（By the Cambodians, for the Cambodians）」との目的掲げ、同遺跡を守るカンボジア人専門家の人材養成に尽力したこと。②戦乱で意気消沈したカンボジアの人たちが自国の文化遺産に対する誇りを取り戻すきっかけとなったこと。③アンコール・ワット遺跡に代表される文化遺産を、国際社会が人類の至宝として保存していく重要性を広く世界に訴求してきたこと。